

2-1 外邦図は「使えるか」？—中国とインドの場合—

石原 潤（京都大）

I はじめに

筆者が外邦図の存在を知ったのは、1960年代の前半、大学院学生であった頃、京都大学文学部地理学教室に資源科学研究所ルートの外邦図の一部が入って、そのインデックス・マップの作成が行われていた時である。ただその時は、たいへん興味を覚えたものの、それを将来使うことになるとは夢にも思わなかった。外邦図のお世話になったのは、1970年代以降である。

II 外邦図の利用—中国の場合—

(1) 中国の集市の歴史地理学的研究

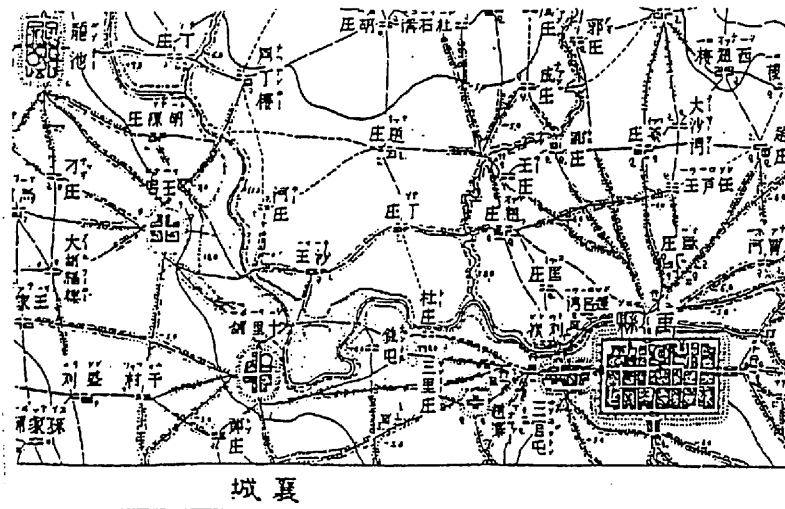
筆者は1971年頃から中国の集市（定期市）の歴史地理学的研究を開始し、まず河北省を対象地域とし

た。その際、明・清・民国時代の地方誌に記載されている定期市の分布状態を、正確な地図の上に落として、比較検討しようとした。普通、地方誌自体に県域などの付図が付されているが、多くは絵図の類いで、それはそれなりに興味深いのであるが、筆者の目的には適さなかった。

そこで筆者は、当時の筆者の情報圏内に入っていた以下の3種の10万分の1図を利用した。

- 1) 日本・参謀本部作成の「仮製10万の1」（京都大学文学部地理学教室所蔵）
- 2) 中華民国製の10万分の1（京都大学人文科学研究所及び名古屋市立大学所蔵）
- 3) 日本・参謀本部製の（「正式」）10万分の1（京都大学文学部地理学教室所蔵）

この内、1)は、いわゆる外邦図の一部で、明治後半（清朝末）以降、半ば非合法に測量・調査し、大

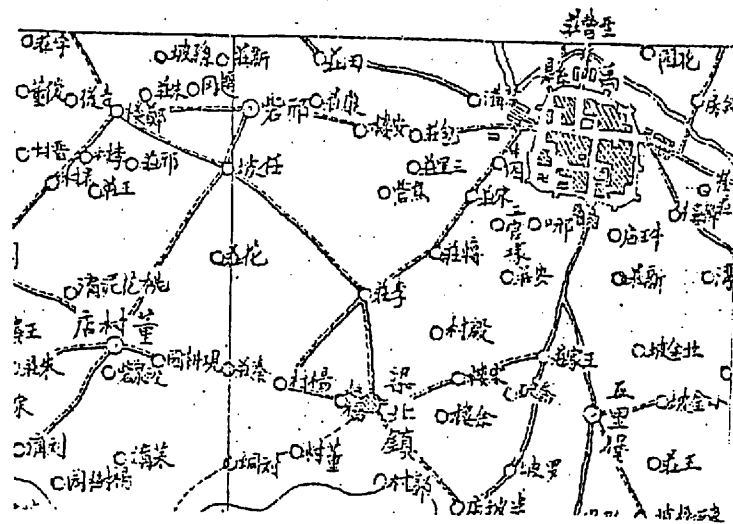


第1図 仮製北支那十万分一図 許州十一号 兎県（原寸大）

大正10(1921)年則図 支那駐屯軍司令部

同 14(1925)年製版 陸地測量部

同 14年8月25日発行 参謀本部



第2図 民国製十万分一図 兎県(兎県四) (原寸大)

中華民國 14(1925)年 5月 印製 東三省陸軍測量部

正期に作製されたと考えられるものだが、実際に使ってみると、地図様式は近代的に見えるが、記載内容は極めて不正確で、地名が違っていたり、方位がおかしかったりして、筆者の目的にはあまり役立たなかった(第1図参照。ただし第1~3図は同一地域を比較するため、河南省の例を示す)。

2)の内、京大人文科研のものは、戦前に集められたものと思われるが、名市大のものは、筆者が勤務していた時にたまたま古本市場に出ていたものを購入したものである。中華民国政府成立以後、1920年代に作製されたもので、実際に使ってみると、地図様式は稚拙だが、記載内容はおおむね正確で、筆者の目的にかなりのところ役立った(第2図参照)。

3)も、外邦図の一部であるが、1930年代に作成されたもので、中華民国製作の10万分の1・5万分の1地形図を元にしながら、しばしば独自に修正を加えて作製されたもので、地図様式も近代的であるし、記載内容も正確である(第3図参照)。筆者は、この図が存在する所については、それを優先的に用いた。

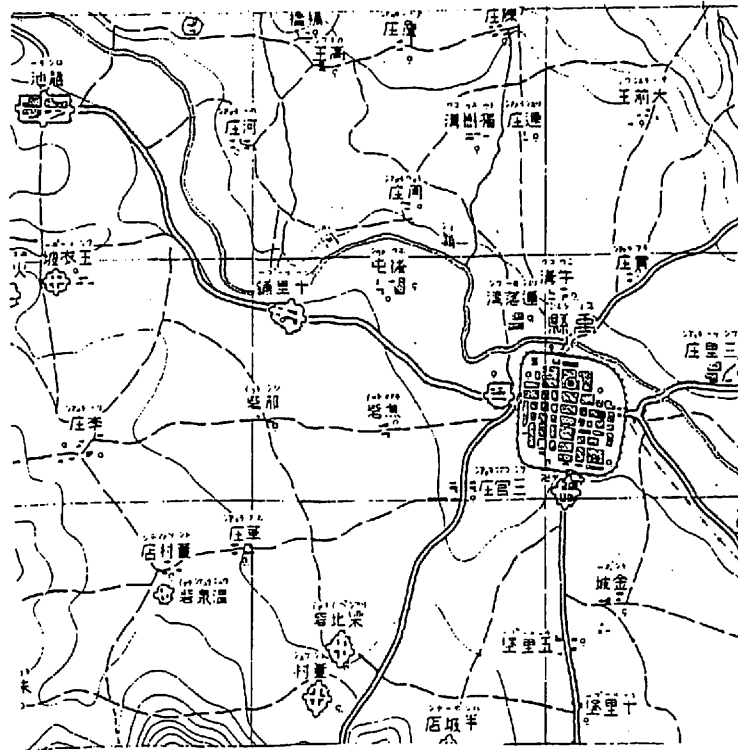
その後筆者は、同様の研究を華中東部の江蘇・浙江・安徽3省についても行い²⁾、その際にも各種の外邦図を用いた。

このように、筆者の目的である、民国期までの定期市所在集落やそれらの間の交通路などの同定という目的にとっては、外邦図は「役立った」と言える。ただし、中国では、同じ地域についても、日本製・中国製の数種の地形図が作成されているので、注意する必要がある。また、各図の間の影響関係など、地図史的問題への興味は尽きない。

(2) 現代中国の自由市場の現地調査

中国での現地調査が可能になり始めた1988年頃から、筆者は現代中国の自由市場(集市の後身)の現地調査を開始した。中国では、現在立派な多色刷りの5万分の1地形図が出来ているが、外国人は使うことも、見ることもできない。そこで筆者は、フィールドワークに際して、古い民国製及び日本の参謀本部製の10万分1・5万分の1・2.5万分の1地形図のコピーを持参して行った。民国製については京都大学人文科学研究所所蔵のもの、日本製外邦図については、京大地理学教室、及びこのころ所在を知ることになった東京大学資料館(当時)所蔵のものである。

調査対象地域は、江蘇省³⁾、河南省⁴⁾、四川省⁵⁾で、いずれもチームを組んでの総合的調査であったので、



第3図 北支那十万分一図 西九行南一段 開封十三号 (原寸大)

昭和10(1935)年製版

〔民国20(1931)年参謀本部陸地測量局製河南省五万分一図〕

陸地測量部

参謀本部

同10年11月25日発行

コピーはチームのメンバー全員に配付された。しかし、残念ながら、現代中国の社会経済的調査のためには、これら古い地図はあまり役に立たなかった。革命後現在までに、中国の集落・道路・地名・行政区画は激変しているからである。ただ、もちろん、古景観の復元や景観変化の研究には大いに役立つことは確かで、中国側共同研究者も、我々が持参した地図には大いに興味を示した。

III 外邦図の利用

—インド・バングラデシュの場合—

筆者は、1980年頃から、国勢調査や官選地誌を用いてインド・バングラデシュの定期市の統計分析と歴史地理学的な分析を行い⁶⁾、1986年頃からは、そ

の現地調査を実施するようになった⁷⁾。ところがインドでは、現在25万分の1地勢図及び5万分1地形図は市販されているが、国境や海岸から100マイルまでの図幅は市販されておらず、また市販分の国外への持ち出しも禁じられている。さらにバングラデシュでは、5万分の1地形図は作られているが、市販されていないし、外国人は見ることも出来ない。

そこで筆者は、京都大学文学部地理学教室、及び所在を知るようになっていた広島大学文学部地理学教室所蔵の、日本軍製の5万分の1地形図(ただしベンガル・アッサム地方のみ作成されている)及び25万分の1地勢図(全インドについて作成されている)をコピーし持参することにした。しかし、両教室所蔵分は全域をカバーしていないので、欠けている部分については、大英図書館地図室所蔵の戦前の One

Inch Map (1 Mile = 1 Inch:すなわち 63,360 分の 1) 及び Quarter Inch Map (1 Mile = 1/4 Inch:すなわち 253,440 分の 1) のコピーを取り寄せて、これを補った。

2 種類の地図を利用してみてわかったことは、日本軍製地図はイギリス製地図の、縮尺を変更し、凡例を日本語訳した、複製であることである。One Inch Map が 5 万分の 1 地図に、Quarter Inch Map が 25 万分の 1 地図になっており、この他にも Half Inch Map が 12.5 万分の 1 地図へと転換して複製されている。なお現在市販されているインドの 5 万分の 1、25 万分の 1 地図も、縮尺は変わっているが、イギリス作成の地図の系譜を引くものである。

これら日本製及びイギリス製の戦前の地図は、現在のフィールドワークにおいてもかなり役立った。もとの地図が精確である上に、インド・バングラデシュの場合、独立後の集落・道路・地名などの改変が、中国ほど顕著ではないからである。

IV むすび

以上、外邦図のユーザーとしての筆者のささやかな経験を述べたが、結論として言えることは、外邦図は、地図が手に入りにくい地域の現地調査に「役立つ」し、手に入る地域についても景観変遷や歴史地理学的研究にとって「使える」と言うことである。ただし、地図が市販されていない地域で、旧日本軍の地図を持ち歩くことはかなり気がとがめることでもあるし、スパイ扱いされる危険もないとは言えない。むしろ、アジア・太平洋の人々にも日本軍製外邦図の存在が知られ、彼らもまたそれを利用できる状況が生まれることが、理想なのかも知れない。

注

- 1) 石原潤 (1973) 河北省における明・清・民国時代における定期市, 地理学評論, 46 (4).
- 2) 石原潤 (1980) 華中東部における明・清・民国時代の伝統的市 (market) について, 人文地理, 32 (3).
- 3) 石原潤 (1992) 蘇州市とその周辺における集市の現

状, (森正夫編『江南デルタ市鎮研究』名古屋大学出版会), 239-270.

- 4) 石原潤・孫尚俊編 (1996) 『中国鄭州市住民の生活空間』名古屋大学文学部地理学教室など.
- 5) 石原潤・傅綬寧・秋山元秀編 (2000) 『成都市とその近郊農村の変貌』京都大学大学院文学研究科地理学教室など.
- 6) 石原潤 (1987) 『定期市の研究—機能と構造—』名古屋大学出版会など.
- 7) Hiroshi Ishihara ed. 1987, *Markets and Marketing in Rural Bangladesh*, Dept. of Geography, Faculty of Letters, Nagoya University. など.